

6. 事業内容

<3年目>

(ア) コミュニティへの図書サービス活動

1-1. コミュニティ図書館への図書の供与

子ども向けにタイ語の絵本にカレン語とビルマ語の翻訳シールを貼付し供与する。大人向けには、毎月各館約95冊のミャンマー国内から購入したニュース、雑誌、一般教養書、小説などを供与する。これらの図書は、コミュニティ図書館内での貸し出しの他、移動図書箱活動にも利用される。

▶ 供与図書数：子ども用図書約980冊、大人用図書約24,000冊

▶ 図書館利用者数（延べ人数）：300,000人

※大人用図書は、カレン族が主流の7カ所の難民キャンプ（以下、カレン系難民キャンプ）を対象。タイ語絵本については、カレニー族が主流の2カ所の難民キャンプ（以下、カレニー系難民キャンプ）を含めた、9カ所のすべての難民キャンプへ供与する。

※難民キャンプの構成

カレン系難民キャンプ：メラウ、メラマルアン、メラ、ウンピナム、ヌポ、バンドンヤン、タムヒン（7カ所）

カレニー系難民キャンプ：バンマイナイソイ、バンメースリン（2カ所）

【変更箇所】 供与図書数：子ども用図書882冊→980冊

絵本出版社からの値引きにより購入冊数を増やすことができた事業1年次の絵本購入実績を参考に、1年次の申請時の予定よりも冊数を増加して購入する。

1-2. 図書サービスの改善を目指した研修会の実施

図書館員を対象に、図書館サービスに関わる基本的な知識・技術を習得する研修会を実施する。事業最終年である3年目は、事業2年目同様、図書サービスの基礎となる、図書館員規則やデータ収集方法の理解、様々な読み聞かせ手法の習得に焦点を当てた研修会を実施するが、同時に、事業終了後の持続的な図書館サービスの実施も考慮し、図書館サービスに関わるマニュアル^{*1-2}の活用方法についても研修内容に組み込む。

①対象者：図書館員

②対象者人数：約50人

③研修内容：図書館での基礎サービス実施手法、特に読み聞かせなどの児童サービス手法の習得、図書館員規則や利用者データ収集方法の理解

④講師：当会職員

⑤日数と回数：年1回、2日間

⑥場所：7カ所のカレン系難民キャンプ

*1-2: 当会が難民キャンプ内で図書館事業を開始した2001年に作成し、その後度々更新した図書館員の業務、図書館サービスの実施方法を記載したマニュアルを使用する。

1-3. 住民を対象にした移動図書箱活動

キャンプ全体への図書へのアクセスの拡充を目指し、事業1年目、2年目に学校以外の社会施設や図書館から遠い住民への移動図書箱の配布活動を行い、普段図書館に来ることができない住民の読書の機会を確保した。

▶ 図書箱配布対象箇所合計数：92カ所（事業2年目までの配布箇所）

【変更箇所】

・現在、第三国定住や帰還による難民キャンプ人口減少を受けて、難民キャンプ内セクションの統合が続いているため、事業3年目では、新たに移動図書箱の配

布活動は実施しない。

・図書配布対象箇所合計数：103 カ所⇒92 カ所

現在、難民キャンプ内のセクションの統合が続いているため対象箇所合計数を変更。

※カレン系難民キャンプを対象

※移動図書箱は難民キャンプ内各セクションのボランティアやそのセクション出身の図書館青年ボランティアによって管理されている。

1-4. 計画、四半期、年次会議の開催

図書館事業に関わる教育部会、図書館委員会、図書館員、青年ボランティアと、学校教員、セクション代表が参加し、図書館活動の振り返りと改善を目指した会議を行う。年始に実施する計画会議では、1年間の計画を立て、3・6・9月の四半期会議に問題の提起と改善策を協議し、年末に1年間の活動の振り返りを行う。

▶計画会議参加人数：140人、各四半期会議：180人（年3回実施、90名×4キャンプ+60名×3キャンプ=合計540名分）、年次会議：280人

※カレン系難民キャンプを対象

(イ) 学校教育の質の改善活動

2-1. 学校教員を対象にした図書活用研修会の実施

学校教員を対象に、学習に効果的な図書の活用方法・学校教育における読書推進の手法を習得することを目指した研修を実施する。事業3年目では、事業2年次に配布した図書利用手引きのカレン語版、3年次に配布するビルマ語版を活用し、様々な絵本の読み聞かせ手法や移動図書箱の活用方法等を指導する。

①対象者：学校教員

②対象者人数：240人

（カレン系7キャンプ：180人、カレニー系2キャンプ：60人）

③研修内容：移動図書箱の利用方法、学校における図書の活用方法の理解

④講師：当会職員

⑤日数と回数：年1回、2日間

（カレン系7キャンプ：保育所・小学校教員向け1日、中・高等学校、ポスト高等学校教員向け1日の合計2日間の開催予定。

カレニー系2キャンプ：保育所・小学校教員と中・高等学校、ポスト高等学校教員の2グループに分けて、それぞれ2日間の開催予定。）

⑥場所：9カ所のカレン系、カレニー系難民キャンプ

2-2. 学習参考書の提供

難民キャンプ内の中・高等学校、大学を対象にした学習補助教材となる辞書・百科事典・学習参考書・英語学習図書を購入し、各図書館に配架する。その後、これらの図書は、移動図書箱活動を通して学校で利用される。

▶供与図書数：1,520冊（9キャンプ分）

※カレン系、カレニー系難民キャンプを対象

【変更箇所】：供与図書数：965冊→1520冊

1年次申請時にはタイ（バンコク）とミャンマー（ヤンゴン）からの購入を予定していたが、ミャンマー国内で種類豊富な図書を安価で購入できるため、事業3年目ではミャンマーからの購入のみとするため、購入冊数が増加。

※移動図書箱活動を通しての学習参考書の提供先はキャンプ内の学校であり、各学校で責任を持って管理される。

2-3. 学校での図書利用手引きの作成

当該手引きのビルマ語版の配布を実施する。また必要に応じて、180校の学校を対象にカレン語版手引きを事業3年目で追加で配布予定。

図書利用手引きのカレン語版は、事業2年目の学校教員を対象にした図書活用研修会で配布した。当初は事業3年目にカレン語、ビルマ語の2言語での手引き配布を予定していたが、近年、第三国定住、帰還、転職等の理由で学校教員の交代が続いていること、及び多くの新人教員が図書活用研修に参加することから、彼らの理解をサポートするため、カレン系難民キャンプの学校の指導言語であるカレン語版の手引きを1年前倒して配布した。事業3年目にかけて手引きの利用状況を確認して、フォローアップするのがよいと判断した。なお、カレン系の学校の指導言語であるカレン語版の配布のみ1年前倒しし、ビルマ語版の配布については予定通り事業3年目に実施する。また、必要に応じて、180校の学校を対象にカレン語版手引きを事業3年目に追加で配布する予定。

- ① 成果物：移動図書箱の利用方法、学校での図書活用事例について書かれた図書利用手引き（カレン語、ビルマ語）
- ② 成果物の著作権：当会
- ③ 成果物作成後のリバイズ：事業期間内は必要に応じて当会で追加、修正をするが、事業終了後は、カレン難民委員会教育部会が必要に応じて追加、修正する。

【変更箇所】 図書利用手引きの配布：事業3年目に2言語での配布⇒カレン語版は事業2年目の配布、ビルマ語版は事業3年目の配布。

2-4. 学校図書室設備改善

学校図書室設備は、事業1～2年目に改善活動を実施した。事業3年目では、引き続き、図書室のモニタリングとフィードバックを踏まえた改善、アドバイスを行う。

▶モニタリング対象校：28校

※カレン系難民キャンプを対象

【変更箇所】：

・事業1・2年次のモニタリングの結果、設備改善活動を行った学校図書館がすでに自立し学校のイニシアティブで活用されていることから、1年次申請書の「自立発展性を目指す」という記載は不要と判断し削除した。自立発展方法・学校図書室の活用方法は学校によって異なる。例えば、各クラスが1週間に1コマ図書館で読書するシステムを作った学校もあれば、学生が学校図書室委員会をつくり、委員会メンバーが低学年の子どもたちに読み聞かせを実施している学校もある。最終的にどのように自立発展性を目指すのは学校次第だが、学校からのリクエストに合わせて当会からも継続してアドバイスを行う予定である。

・モニタリング対象校数：25校→28校

事業一年目の完了報告書内で記載の通り、難民キャンプ内の教育部会からの提案及び学校のニーズを考慮し、学校図書室設備改善対象校数を25校から28校に変更。

2-5. カレン語教科書、教員指導書の印刷支援

5年生用のカレン語科目のカリキュラム変更に伴い、カレン難民委員会教育部会が教科書、教員指導書の改訂を行う。母語であるカレン語の識字教育は、読書や図書の活用の基礎になるため、この印刷支援を行う。

▶印刷数：カレン語教科書5,000冊、教員指導書400冊1

- ① 成果物：5年生のカレン語教科書、教員指導書

- ② 成果物の著作権：カレン難民委員会教育部会
- ③ 成果物作成後のリバイズ：カレン難民委員会教育部会

【変更箇所】：難民キャンプ委員会教育部会から 2018 年に 5 年生のカレン語教科書、教員指導書の改定を行うための印刷支援のリクエストがあった。母語となるカレン語の教育はすべての科目の基礎となり、学校教育の質の維持にも不可欠であるため、3 年次より本コンポーネントを追加。

※教科書は学校の共有・所有物となる。学期中は生徒に貸し出されるが、各学期終了後は、学校に返却される。

(ウ) 青年による読書推進活動の実施

3-1. 青年ボランティア育成研修会

高校生を中心に構成される青年ボランティアを対象に、読書推進活動の手法を習得することを目指す図書館青年ボランティア育成研修会を実施する。

①対象者：図書館青年ボランティア対象者：学校教員対象：図書館青年ボランティア

②対象者人数：193 人

③研修内容：人形劇によるおはなし会を中心とした読書推進活動手法の習得

④講師：当会職員

⑤日数と回数：年 1 回、2 日間

⑥場所：7 ヲ所のカレン系難民キャンプ

【変更箇所】対象者人数：208 人→193 人

青年ボランティアの数は読書推進活動対象となるセクションの数が反映されているが、活動 1-3 の移動図書箱配布活動と同様、対象となるセクションの数が変更になったため、青年ボランティアの数が申請時よりも減少している。

3-2. 青年ボランティアによるイベントを通じた読書推進活動

3-1 で研修を受けた図書館青年ボランティアが学校や地域住民、さらに難民キャンプ内の少数民族を対象にした読書推進活動を実施する。

読書推進活動の種類は下記の 3 種類となる。

① 学校児童を対象にした読書推進活動

実施回数：各難民キャンプ年 2 回開催

② 図書館から離れた地域の住民を対象にした読書推進活動

実施回数：各セクション年 20 回開催

③ 少数民族の文化交流を目的とした読書推進活動

実施回数：ヌポ難民キャンプで年 1 回開催

▶活動実施回数：23 回、▶活動を実施した人数：193 人

※カレン系難民キャンプを対象

【変更箇所】対象者人数：208 人→193 人

同上の理由より対象者人数が変更。

活動 1-1～1-4 のコミュニティ図書館の改善のための活動では、SDGs の目標 4(質の高い教育)・ターゲット 4-2、4-6 に、配架されている本が通信技術や縫製、農業に関する書籍もあることからターゲット 4-3 に、活動 2-1～2-4 での補助教材や学習参考書の活用環境の改善に伴う活動ではターゲット 4-1、4-2 に、活動 3-1・3-2 の青年による読書推進活動はターゲット 4-7 に貢献すると考える。

なお、本年が事業最終年となるが、事業終了後の持続発展性については、下記のように考えている。

① キャンプ継続の期間

	<p>現在、タイ国境の難民キャンプから難民帰還が始まっているが、現時点で帰還を希望している人々はまだ少なく、いつ規模の大きな帰還が始まるのかまだわからない状態である。本事業終了後、難民キャンプがある限りは、カレン難民委員会教育部会、及び、難民キャンプ内の教育部会がこのコミュニティ図書館を通じたノンフォーマル教育支援事業の継続運営についてイニシアティブをとる予定である。</p> <p>難民キャンプという性質上、キャンプ内の社会サービス提供には、外部からの資金サポートが不可欠である。当会は、本事業終了後もメーソットに事務所を置くが、コミュニティ図書館活動運営はカレン難民委員会教育部会がイニシアティブをとり、当会の関わりは、テクニカルアドバイス、限定的な資金サポートとなる予定である。</p> <p>② 帰還が開始された場合</p> <p>将来的に帰還が進み、難民キャンプの縮小、閉鎖がある場合は、タイ政府の方針に従い、学校、コミュニティ図書館含め、難民キャンプ内の社会施設も閉鎖することになる。その場合、コミュニティ図書館内の図書、本棚、その他資材（移動図書箱配布活動含む）については、帰還民と共にミャンマー国内カレン州に移動することを想定している。この点、将来的に、カレン州でどのように図書を活用するのか、カレン難民委員会教育部会、及びカレン州で教育支援活動をしているカレン教育部会と現在協議をしている。また、本事業で研修を受けた図書館関係者、教育関係者も将来的に帰還することになるが、彼らの図書館活動に関わる知識、技術は帰還先でも活用されることが想定されており、特に四半期会議の提案によると、将来的にカレン州での図書館事業を希望している関係者が多く、彼らのイニシアティブで図書館活動を立ち上げることが可能であると考えられる。その場合、カレン難民委員会教育部会、カレン教育部会と、上記の図書の移送先を調整するなどの協議をしていく予定である。尚、現時点でいつ大規模な帰還が起こるのか、また当該キャンプが閉鎖されるのか等の目は立っていないため、3~4年後にどのような状況になっているか明言するのは難しい。よって現時点では、上記の教育部会への図書や図書館資材移転の話継続して進めることに徹し、事業が持続するための最善を尽くす。帰還後の計画が明確になった場合には教育部会と連絡を取り、帰還先の状況を確認するとともにフォローアップを続ける予定である。</p>
	<p>直接裨益人口：</p> <ul style="list-style-type: none"> (ア) コミュニティへの図書サービス活動 <ul style="list-style-type: none"> - 図書館員：約 50 人 (イ) 学校教育の質の改善活動 <ul style="list-style-type: none"> - 学校教員：約 240 人 (ウ) 青年による読書推進活動の実施 <ul style="list-style-type: none"> - 図書館青年ボランティア：193 人 <p>間接裨益人口：</p> <ul style="list-style-type: none"> (ア) コミュニティへの図書サービス活動 <ul style="list-style-type: none"> - 図書館利用者：約 88,000 人（7カ所のカレン系難民キャンプ人口） (イ) 学校教育の質の改善活動 <ul style="list-style-type: none"> - 学校に通う学生：約 30,000 人 (ウ) 青年による読書推進活動の実施 <ul style="list-style-type: none"> - 読書推進活動対象となる子どもたち：約 42,000 人 <p>（7カ所のカレン系難民キャンプ人口のうち、18歳未満の子どもたち）</p>
<p>7. これまでの成果、課題・問題点、対応策など</p>	<p>① これまでの事業における成果（実施した事業内容とその具体的成果）</p> <ul style="list-style-type: none"> (ア) コミュニティ全体において図書サービスが改善されている。

1-1. コミュニティ図書館への図書供与

事業2年次では、ミャンマー（ビルマ）から成人向けの図書（新聞、雑誌、一般教養書、小説など）を計画通りに購入し、8月までに10,866冊を図書館に配架した。4月～8月の図書館利用者数は、延べ175,657人（17歳以下の子ども109,084人/62%、18歳以上の大人66,573人/38%）であり、多くの住民の情報収集や学習などに図書が利用されている状況である。

コミュニティ図書館の図書に関するニーズ調査、図書の管理状況については、月1回のモニタリング時に聞き取り調査を実施する予定。

1-2. 図書サービスの改善を目指した研修会の実施

この研修会は9月から10月にかけて実施を計画している。研修を通して、図書館員の役割と業務内容の理解、図書館活動に関わるデータ収集と報告書の作成方法の理解、パソコンを利用した情報共有方法の把握、さらに様々な読み聞かせ手法の習得を目指す。

1-3. 住民を対象にした移動図書箱配布活動

事業2年次には、22個の移動図書箱を難民キャンプ内のセクションに配布した。事業1年次に配布した70カ所と合わせて、事業2年次では、92カ所のセクションで移動図書箱が利用されている。

1-4. 計画、四半期、年次会議の開催

事業2年次では、6月の四半期会議に、教育部会、図書館委員会、図書館員、学校教員、青年ボランティアの当初計画していた参加人数（180人）の88%にあたる159人が参加した。申請時に設定した指標の90%に現時点では僅かに届いていない。その理由は、教育部会、図書館委員会のメンバーが難民キャンプ内の他の業務のために本会議に参加できなかったことがあげられる。特に図書館委員会のメンバーが難民キャンプ委員会やセクションリーダー、学校教員等から選出されており、更には複数の役職を兼務していることもあるため、他の業務や会議への参加を優先したケースも見られた。今後スケジュールを調整し、多くの図書館関係者が参加できる日程で調整する予定である。

会議では、図書館を改善するための提案を84個得ることが出来た。7カ所のキャンプでの会議のうちの5カ所において、本国に帰還した後の図書活動に関する提案がなされている。具体的には帰還地のコミュニティでの図書館の設置や図書の支援、帰還後の図書活動に関する話し合いの必要性などの提案があった。また、カレン語で書かれた図書やカレン族の歴史に関する図書の更なる購入の提案や、図書館員、青年ボランティア、難民キャンプ委員会や子どもたちの親などとの連携・協力に関する提案も多く寄せられた。

新規図書購入に関しては、図書館利用者から特定のテーマの購入の提案があった場合、関連図書があるかどうかミャンマー国内の書店に問い合わせをする。上記のようにカレン族の歴史に関する図書についてはリクエストを頻繁に受けるが、カレン族の歴史についての図書はほとんど出版されていない。尚、図書選定時には、タイ政府の方針に則り、特定の政治的・宗教的思想を宣伝するための図書は除いている。

（イ）教育の質を改善するための補助教材や学習参考書を活用する環境が整備されている。

2-1. 学校教員を対象にした図書活用研修会の実施

事業2年次において、6～7月に実施した学校教員を対象とした研修会では、当初計画していた参加人数（240人）の102%にあたる244人の教員が参加した。

研修後に実施した質問紙調査（有効回答率97.4%）では、研修会参加者全体

を見ると79.1%が研修を通じて知識と技術を得ていることが分かった。研修は、①保育所・小学校教員、②中・高等学校・ポスト高等学校教員に分けて、それぞれのニーズに合わせて実施したが、研修内容を十分に理解できたと回答したのは、参加者のうち、前者が71.7%、後者が86.6%となった。

コミュニティ図書館のあるカレン系の7カ所の難民キャンプの保育所・小学校教員に対する研修では、普段から図書館から絵本を借りて使っている教員も多く、特に絵本を使った読み聞かせ手法については理解度が高かった。一方で、折り紙を使った識字教材の作成手法について十分に理解できたと答えた参加者は6割に満たなかったため、図書がない場合でも、身の回りの物を識字教材として活用する手法について、より実践的に参加者に伝える必要があった。また、カレニー系の2カ所の難民キャンプの保育所・小学校教員の理解度は、上記のカレン系難民キャンプと同様であったが、学校図書館を利用した読書クラスが学校カリキュラムの中に入っており、本研修がこの読書クラスにそのまま活用できて有益であるため、研修の回数を増やしてほしいという提案が多く挙げられた。中・高等学校・ポスト高等学校の教員への研修については、9カ所すべての難民キャンプで、図書の登録、分類、貸出方法、修繕含む、図書の管理方法について参加者の関心が高く、実際、参加者の約90%が研修を通して図書の管理方法について十分な知識を得たと回答した。

本研修では図書利用手引きを配布したが、研修者の70%以上が、その使い方について十分理解できたと回答した。各学校では、今後、この手引きを参考にしながら、図書館からの移動図書箱活動を通して図書を活用する。

2-2. 学習参考書の提供

学習参考書をミャンマー国内から購入し、2,635冊を21図書館へ供与した。また、カレニー系難民キャンプに対しては、960冊を供与した。当初予定では各年1,520冊配布する予定だったが、購入冊数は2,635冊を増加した。当初の計画から学習参考書の購入総額は変更していないが、タイ国内ではなくミャンマー国内からの購入のみにしたことから様々な図書が安価で購入できるようになった。これらの学習参考書は、移動図書箱活動を通して、各学校で利用されている。教員のニーズの聞きとり調査によると、ニーズに合った図書が各図書館に配架されているが、学校数に対して移動図書箱で借りられる学習参考書の冊数が限られていることもあり、各学校に十分な冊数の図書欲しいという提案が挙げられている。

2-3. 学校での図書利用手引きの作成

移動図書箱の利用方法や、絵本の読み聞かせ手法の紹介、さらに事業1年目の図書活用研修時に収集した教員による図書利用事例を記載した図書利用手引き（カレン語版）を作成し、事業2年目に実施した学校教員を対象にした図書活用研修会で配布した。年内にビルマ語へ翻訳し、事業3年目にビルマ語版を配布する予定である。

2-4. 学校図書室設備改善

事業1年次に28校の学校図書室の整備を行った。当初は25校の整備を行う予定だったが、難民キャンプ内の教育部会からの提案及び学校のニーズを考慮し、対象学校数を2016年に増やした。事業2年次では、これらの学校図書館のモニタリングを実施している。いずれの学校においても、学校の休み時間や授業で活用されているが、特にメラ難民キャンプの第2高等学校では、学生自ら学校図書館委員会を作り、朝や昼休みに低学年の子どもたちへの読み聞かせ活動を始めるなど、設備だけでなく、学校図書館の運営方法や活動の改善に学生が主体的に取り組む姿が見られた。

(ウ) コミュニティでの読書推進活動への参加を通して、青年が自主的に活動できる機会が増えている。

3-1. 青年ボランティア育成研修会

6月に実施した青年ボランティア育成研修会では、計画された参加者(198人)のうち97%にあたる192人が参加した。

研修後の質問紙調査(有効回答率97.6%)では、全体として参加者の83.1%が、知識と技術を習得していることが分かった。項目ごとの理解・習得度を見ると、絵本の読み聞かせが83.6%、パネルシアター84.7%、人形劇79.5%、折り紙88.1%、アクションソングやアイスブレイキングゲーム(手遊び歌や簡単に体を動かすゲームで、おはなしを聞かせる前の導入、準備体操のような役割を担う)については81.3%という結果となり、いずれも指標である70%を満たしていることが分かった。特に高い値が出ているアクションソング・アイスブレイキングゲームに関して、同上の質問紙調査では、新たな歌やゲームを知りたいという提案が、複数の参加者から挙がった。

3-2. 青年ボランティアによるイベントを通じた読書推進活動

青年ボランティアへの研修後、読書推進活動が実施されている。6月～7月にかけて、図書館青年ボランティアが人形劇キャラバン公演を各難民キャンプで実施し、学校施設などを利用して、子どもたちへ人形劇などを利用した読み聞かせ活動を行った。全キャンプを通して、5,813人の子どもたちの参加があった。また、青年ボランティアは、難民キャンプ内の各セクションで週末に読書推進活動を実施している。この活動では、絵本の読み聞かせ、折り紙や識字ゲームなどのレクリエーション活動、図書の貸出といった活動を実施した。4月～8月までに全キャンプを通して734回の読書推進活動を実施し、計24,794人の子どもたちの参加があった。青年ボランティアはグループを組んで難民キャンプ内の92カ所のセクションで読書推進活動を実施しているが、各グループごとの読書推進活動回数は、8月までに約8回となっており、研修に参加したすべて(100%)の図書館青年ボランティアが読書推進活動を実施している。

② これまでの事業を通じての課題・問題点

難民キャンプに対する国際支援の減少に拍車がかかっており、この1～2年でNGOの事業縮小・撤退が相次いでいる。そのため、難民キャンプ運営、医療、教育含むあらゆる分野で、社会サービスに携わる人員(難民キャンプ委員会職員、学校教員、医療関係者など)の削減や給与額の減少が続いている。弊会で事業を実施している教育分野においては、低賃金、業務負担の増大、経験が浅い教員によるクラスの規律の維持の難しさなどが要因となり、学校教員の離職が頻繁に起きている。図書館員についても、難民キャンプによっては、より良い賃金を求めているの転職や帰還などを理由に離職が続いている。人材の入れ替わりがあるため、研修実施後の知識や技術の定着が容易ではない。

また、第三国定住や帰還を受けて、難民キャンプの人口が減少しており、セクションの統合や学校の統合が始まっている。今後、いつ、どれくらいの規模の統合があるか不透明である。この状況も踏まえて事業計画を立てており、現時点では課題とはなっていないが、急に規模の大きな帰還が始まり、難民キャンプの縮小することがあれば、それに合わせて事業の対象や内容を変更する必要がある。

	<p>③ 上記②に対する今後の対応策</p> <p>第三国定住や帰還、国際支援の減少については、外部要因になるため対応が難しいが、研修後の知識や技術の定着については、事業2年次に作成した手引きの活用や図書館員同士による定期的な知識や技術の交換会の実施、さらに当会職員のモニタリングの強化を通してサポートしていく。</p> <p>難民キャンプそのものの縮小があれば、それに合わせて事業の対象や内容を変更する。その場合には、すみやかに変更届を提出する。</p> <p>④ 持続可能な開発目標（SDGs）」の該当目標の視点からも言及してください。</p> <p>下記8に合わせて記載する。</p>
<p>8. 期待される成果と成果を測る指標</p>	<p>ア) コミュニティ全体において図書サービスが改善されている。</p> <p>1-1-1. 85%のコミュニティ図書館が住民のニーズに合致した図書を所有している。</p> <p>➤ 確認方法：聞き取り調査、観察調査</p> <p>基準：各図書館で18歳未満の子ども5人、18歳以上の大人5人を対象に、図書がニーズに合っているか、4段階評価（よく合致している、合致している、あまり合致していない、全く合致していない）での聞き取り調査を実施し、上2段階の評価をした住民の割合が85%に達しているか。</p> <p>1-1-2. 85%のコミュニティ図書が図書を適切に管理している。</p> <p>➤ 確認方法：観察調査</p> <p>基準：図書の登録、図書の分類、図書の展示状況、図書の清掃状況、貸出記録管理の各項目について、その有無（2段階）を確認し、有とした図書館数の割合が85%に達しているか。</p> <p>1-2-1. 計画した参加者の90%が図書サービスの改善を目指した研修会に参加した。</p> <p>➤ 確認方法：活動報告書</p> <p>基準：計画した参加者数に対して、活動報告書に記載された研修会の参加人数の割合が90%に達しているか。</p> <p>1-2-2. 研修会参加者の80%が研修を通して図書館サービスについての知識と技術を習得した。具体的には、図書館運営ルール、図書貸し出し手法、データ収集・記録手法、読み聞かせ手法などの理解度・習得度を質問票を元に確認する。</p> <p>➤ 確認方法：研修会での質問票</p> <p>基準：研修内容に沿って、図書館運営規則、図書館利用者の記録方法、データ収集方法、様々な読み聞かせ手法などの項目の理解度・習得度について、研修終了時に質問票を使って5段階評価で確認し、上の2段階に当てはまる研修参加者の割合が80%に達しているか。</p> <p>1-2-3. 研修会参加者の70%が図書館サービスを適切に提供することができる。</p> <p>➤ 確認方法：聞き取り調査、観察調査</p> <p>基準：研修会で習得した図書館運営規則、図書館利用者の記録方法、データ収集方法、様々な読み聞かせ手法などの項目の活用状況について、研修終了時から半年後に質問票を使って5段階評価で確認し、上の2段階に当てはまる研修参加者の割合が70%に達しているか。</p>

1-3. 移動図書館が提供されたセクションの数。3年目：92カ所(2年目と同数)
➤確認方法：活動記録
基準：活動記録を確認し、移動図書館が提供されたセクションの数が92カ所に達しているか。

1-4-1. 計画された参加者の90%が計画・四半期・年次会議に参加した。
➤確認方法：活動記録
基準：計画した参加者数に対して、活動報告書に記載された会議の参加人数の割合が90%に達しているか。

1-4-2. 7カ所のキャンプの四半期・年次会議において、図書館を改善するための提案が84個挙げられている。
➤確認方法：会議での観察調査
基準：会議で挙げられた提案総数が84個に達しているか。

上記活動(1-1~1-4)のコミュニティ図書館の改善のための活動にて、より多くの住民が良質な図書を含めた図書サービスに触れることにより、SDGsのターゲット4-2に掲げられている教育へのアクセスやその準備に貢献し、また4-6にある様な識字能力が向上すると考える。また配架されている本が通信技術や縫製、農業に関する書籍もあることからターゲット4-3にある技術教育・職業教育の知識を養成することにも貢献する。

(イ)教育の質を改善するための補助教材や学習参考書を活用する環境が整備されている。

2-1-1. 計画された参加者の90%が補助教材となる図書を活用するための研修会に参加している。
➤確認方法：活動記録
基準：計画した参加者数に対して、活動報告書に記載された研修会の参加人数の割合が90%に達しているか。

2-1-2. 研修会参加者の80%が研修を通じて知識と技術を習得している。具体的には、マニュアルに基づいた移動図書館の利用方法、絵本やその他の道具を利用した読み聞かせ手法、学校における図書の活用手法についての理解度・習得度を質問票を元に確認する。
➤確認方法：質問票
基準：研修内容に沿って、移動図書館の利用方法、読み聞かせ手法、学校における図書活用手法などの項目の理解度・習得度について、研修終了時に質問票を使って5段階評価で確認し、上の2段階に当てはまる研修参加者の割合が80%に達しているか。

2-1-3. 研修会の参加者の70%が研修会で習得した知識と技術を適切に活用している。
➤確認方法：聞き取り調査、観察調査
基準：研修会で習得した移動図書館の利用方法、読み聞かせ手法、学校における図書活用手法などの項目の活用状況について、研修終了時から半年後に質問票を使って5段階評価で確認し、上の2段階に当てはまる研修参加者の割合が70%に達しているか。

2-2. 70%の図書館が、教員のニーズに合致した補助教材となる学習参考書を適

切に管理している。

➤確認方法：教員ニーズの聞き取り、観察調査

基準：学習参考図書について、図書の登録、図書の分類、図書の展示状況、図書の清掃状況、貸出記録管理の各項目について、その有無（2段階）を確認し、有とした図書館数の割合が70%に達しているか。

2-3. 180校の学校に 図書利用手引きを配布されている。

➤確認方法：活動記録

基準：活動記録に記載された図書利用手引きを配布した学校数が180校に達しているか。

2-4-1. 25校の学校の図書室が整備されている。

➤確認方法：観察調査

基準：観察調査により、図書数、スペース、本棚、ポスターや装飾などの項目について整備された学校図書室が25校に達しているか。

2-4-2. 図書室が整備された学校の70%が適切に図書を管理している。

➤確認方法：観察調査、聞き取り

基準：観察調査により、図書の登録、図書の展示状況、図書の清掃状況などの項目について、その有無（2段階）を確認し、有とした学校図書室の割合が70%に達しているか。

2-5. 5年生用のカレン語教科書5,000冊、教員指導書400冊が印刷され、カレン難民委員会教育部会に渡されている。

➤確認方法：観察調査

基準：観察調査により、印刷したカレン語教科書、教員指導書がそれぞれ5,000冊、400冊に達し、カレン難民委員会教育部会に渡されているかどうか。

上記活動（2-1～2-5）の教科書・教員指導書の印刷支援、補助教材や学習参考書の活用環境の改善に伴う活動は、SDGsターゲット4-1にある質の高い初等・中等教育の質を高めることに寄与し、また4-2にある就学前教育レベルの子どもも活動対象に含むことから、ターゲット達成にインパクトを与えると考える。

（ウ）コミュニティでの読書推進活動への参加を通して、青年が自主的に活動できる機会が増えている。

3-1-1. 計画された参加者の90%が読書推進活動に必要な知識と技術を習得するための研修会に参加している。

➤確認方法：活動記録

基準：計画した参加者数に対して、活動報告書に記載された研修会の参加人数の割合が90%に達しているか。

3-1-2. 研修会の参加者の70%が知識と技術を習得している。具体的には、青年ボランティアの役割、様々な読み聞かせ手法、人形劇の実践手法、おはなし会の実践手法の理解度・習得度についてアンケート調査を通して確認する。

➤確認方法：研修前後のアンケート調査

基準：研修内容に沿って、青年ボランティアの役割、様々な読み聞かせ手法、人形劇の実践方法などの項目の理解度・習得度について、研修終了時に質問票を使って5段階評価で確認し、上の2段階に当てはまる研修参加

者の割合が70%に達しているか。

3-2-1. 研修会に参加した青年ボランティアが実施した各グループの読書推進活動の回数。3年目：19回

▶確認方法：読書推進活動記録

基準：活動記録を確認し、図書館青年ボランティアの各グループが読書推進活動を実施した回数が19回に達しているか。

3-2-2. 研修会に参加した80%の青年ボランティアが読書推進活動を実施している。

▶確認方法：活動記録

基準：活動記録を確認し、全図書館青年ボランティア数に対して、読書推進活動に参加している図書館青年ボランティア数の割合が、80%に達しているか。

上記活動(3-1・3-2)は、青年が自主的に参加することにより文化多様性の理解等を促し、SDGsターゲット4-7にある持続可能な開発のための教育に貢献する。